

育児による親の発達と それを支える家族要因に関する研究

岡本 祐子

(2001年9月28日受理)

A Study on Parental Development by Child-rearing and Related Family-Factors

Yuko OKAMOTO

The present study was designed to investigate the parental feelings of growth and development by child-rearing and the family-factors which supported and facilitated these feelings.

Data were obtained on the basis of questionnaire distributed to 182 married couples (91 fathers and 91 mothers) who had children of 3~5 years old.

The main results were summarized as follows:

1. Mothers had stronger feelings of growth and development by child-rearing than fathers. The results supported the former studies.
2. The meanings of having a job or not having a job were important factors for parental development. That is, mothers who had positive and active meanings for their jobs experienced higher level of parental development than other mothers. Fathers whose wives had positive and active meanings for their jobs also experienced higher level of parental development than other fathers.
3. The family-factors which supported parental feelings of growth and development were different between house-wife-mothers and working mothers. Especially it was suggested that the accordance of husband and wife was important for the parental development in working mothers' families.

Key Words: parental feelings of growth and development, child-rearing, family-factors, accordance of husband and wife.

キーワード：親の成長・発達感、育児、家族要因、夫婦の調和性。

1 問題および目的

子どもの発達にとって、家庭が心理・社会的に健全な保育環境であることは、重要な要件である。しかしながら今日、母親役割の受容や育児への積極的関与ができない母親が増加している。また、少子化・長寿化にともなうライフサイクルの変化によって、親にとっての子育ての意味も再認識されるようになってきた。つまり、育児は、親が子供の成長・発達を援助するのみでなく、育児によって親の側も成長・発達をとげるという相互発達の営みであるという見方が、改めて見直されている。この問題は、我が国では古くから「育

児は育自」として、経験的に認識されてきたが、これを実証的に検証した研究として、柏木・若松(1994)、牧野(1996)などが見られる。

柏木・若松(1994)は、幼児をもつ父親・母親を対象に、親となることによる成長・発達感の内容を分析し、柔軟さ、自己抑制、視野の広がり、運命・信仰・伝統の受容、生きがい・存在感、自己の強さという6つの因子を見出している。この研究によると、母親は父親よりもこの6因子のすべてにおいて成長・発達感が高かった。この結果について柏木らは、母親は父親に比べて、日々、直接的に子育てに携わっているため、相対的に子どもとのかかわりの少ない父親よりも、よ

り深くこのような意識や体験を有するのであろうと考察している。

また牧野 (1996) は、父親の子育てへの関与の強さと父親の親としての自覚、人間としての成熟、およびストレスの関連性を検討している。その結果、「親としての自覚」と「人間としての成熟」については、かなりの項目で関連性が見出された。「親としての自覚」では、子育てへの関与の程度の高い父親ほど「親としていいかげんなことはできないと思うようになった」「子供の手本になるように心掛けるようになった」「子供というものに対する理解が深まった」などと答えている者が多かった。「人間としての成熟」についても同様に、子育てへの関与の程度が高い父親ほど、「精神的に強くなった」「忍耐力がついた」と答えている者が多かった。さらに牧野は、父親にこのようなポジティブな変化をもたらした具体的な子育て体験について分析し、父親は、「しつけ」「おむつのとりかえ」「相談相手」「本を読んであげる」など、子育てにかかわることにより、親として自覚するようになったり、人間として成熟していくことになると示唆している。

以上のような研究から、母親のみならず父親も、子育てに主体的、直接的にかかわることが、親としての成長・発達感を促進させると考えられる。また、母親・父親が自ら、成長・発達感を体験できることは、育児への積極的関与を促進させるというよい循環が形成されると思われる。しかしながら、すべての親が育児に積極的に関与し、このような発達感を獲得できているわけではない。そこで本研究は、親の側の成長・発達感を支える家族要因について分析した。つまり、父親・母親の育児による発達を支える要因として、親役割の

受容、夫婦の調和性、父親の育児参加の程度、母親の職業観の4つを仮定し、親の側の発達との関連性を検討することを目的とした。

2 方 法

(1) 調査対象者

3～5歳の幼児をもつ夫婦91組、合計182名。母親の就労形態は、フルタイム16名、パートタイム14名、専業主婦61名であった。

(2) 手続き：以下の内容からなる質問紙調査を行った。

1) 親となることによる発達：柏木・若松 (1994) による「親となることによる変化・発達に関する調査」49項目。これらの項目は、I柔軟性、II自己抑制、III視野の広がり、IV運命・伝統・信仰の受容、V生きがい・存在感、VI自己の強さの6因子から構成されている。

2) 母親の職業観 (母親のみに質問)：表1に示した職業をもつ理由、またはもたない理由、それぞれ8項目の中から複数回答で選択させた。

3) 親役割の受容：大日向 (1988) の「母親役割の受容に関する項目」12項目。これらの項目は、積極的・肯定的意識6項目、および消極的・否定的意識6項目のサブカテゴリーから構成されている。父親には、これを一部、修正して用いた。

4) 夫婦の調和性：数井ら (1996) による「結婚適応尺度」"The Marital-Dyadic Adjustment Scale" (MDAS) 日本版19項目。

5) 父親の育児・家事参加：柏木・若松 (1994) を参考に、8項目を作成した。

表1 母親の職業をもつ理由・もたない理由

職業をもつ理由	職業をもたない理由
A できれば仕事をしたくないが、やむを得ず働いている。(生活のため、家業だから、等)	A 家事・育児が好きだから(したいから)
B 子供の教育費、マイホーム資金などのため。	B 子供が小さいうちは、育児は母親の責任だと思うから
C 自分で自由に使えるお金がほしいから	C 趣味・学習・ボランティア活動がしたい(している)から
D 視野を広め、社会のことを知るため。	D 自分が働かなくても生活していけるから
E 自分の能力、技術、資格を生かすため。	E 時間に縛られたくないから
F 現在の仕事が好きだから。	F 自分の希望する仕事が見つからないから
G 仕事は生きがいでいいから。	G できれば仕事をしたいが、家庭の事情で働けない(家族の協力が得られない。病人、老人がいる、等)
H その他	H その他

表2 母親の職業観とその分類基準

有職群	無職群
自己実現重視群：D, E, F, G のいずれかを選択	積極群：A 又は C を選択
経済重視群：B, C のいずれかを選択	母親の責任群：B を重視、又は B のみを選択
消極・不満群：A を選択	消極・不満群：D, E, F, G のいずれかを選択

(3) 結果の整理：

1) 親となることによる発達：49項目各々につき、「とてもあてはまる」(5点)～「全くあてはまらない」(1点)として得点化し、総得点および各々の因子の得点を算出した。

2) 母親の職業観：表1に示した8つの理由のいずれかを選択したかによって、表2に示した6群に類型化した。

3) 親役割の受容：12項目各々につき、「とてもあてはまる」(5点)～「全くあてはまらない」(1点)として得点化し、総得点を算出した。積極的・肯定的項目、消極的・否定的項目とも、得点の高い方が、親役割をよく受容できていることを示している。

4) 夫婦の調和性：数井ら(1996)のマニュアルに従って、夫婦の調和性の総得点およびサブカテゴリーである日常生活・夫婦生活における夫婦の一致性得点、夫婦関係の満足感得点を算出した。

5) 父親の育児・家事への参加の程度：8項目各々について、「毎日する」(5点)、「週2・3回する」(4点)、「週末のみする」(3点)、「たまにする」(2点)、「全くしない」(1点)として得点化し、総得点を算出した。

また、母親の職業の有無別に分析したところ、表5、表6に示したように、無職群では、父親に比べて母親は、消極的・否定的意識が有意に高く、全体的な親役割の受容意識も有意に低かった。積極的、肯定的意識は、有職群・無職群とも大きな相違は見られないのに対して、消極的・否定的意識は、無職の母親では強く体験されていた。この結果は、有職の母親は、職業という育児とは別の世界をもっていることにより、育児の否定的意識、特に育児による制約感が軽減されているためであろうと考えられる。

(3) 夫婦の調和性

夫婦の調和性得点は、表7に示した。1要因分散分析およびt検定の結果、そのうち、夫婦関係の満足感において、母親よりも父親の方が有意に高得点を示した。

(4) 父親の家事・育児参加

父親の家事・育児参加については、1要因分散分析およびt検定の結果、母親よりも父親の方が、父親の家事・育児参加度を高く認知していること、つまり、父親の家事・育児参加の程度は、妻の夫に対する認知・評価よりも、夫の自己認知・評価の方が高い傾向が見られた ($t(181) = 1.74, p < .10$)。

3 結果および考察

1. 父親・母親の比較

(1) 親となることによる発達

「親となることによる発達」の各因子および全体の平均得点は、表3に示した。各々の得点について、因子の要因に関する1要因分散分析を行った結果、いずれの得点においても有意な効果が認められた。そこで、t検定を行った結果、表3に示した各因子について、父親よりも母親の方が有意に高い得点を示した。この結果は、柏木・若松(1994)を支持するものであり、昼夜、子どもにかかわり子育てに携わっている母親は、相対的に子どもに関わることが少ない父親よりも、親となることによる発達感を強く体験していることが示唆された。

(2) 親役割の受容

親役割の受容得点は、表4に示した。(1)と同様に1要因分散分析およびt検定の結果、母親よりも父親の方が有意に高い得点を示し、父親の方が親役割をよく受容できていることが示唆された。特に、消極的・否定的意識は、父親に比べて母親の方がかなり高かった。これは、一般的に育児の主責任者であり、子供に関わることの多い母親の方が、子育ての大変さやストレス、育児による制約感などの否定的側面をよく体験し、認知しているからであろうと考えられる。

2. 親としての発達を支える要因の分析

次に、母親を中心に、親役割の受容、夫婦の調和性、夫の家事・育児参加、母親の職業観と、親としての成長・発達感の関連性について検討した。

(1) 親役割の受容との関連性

母親役割の受容得点の平均値41.01よりも得点の高い者を高群(45名)、低い者を低群(46名)として、親の発達感得点との関連性を検討した。表8に示したように、II自己抑制、IV運命・伝統・信仰の受容、V生きがい・存在感の各因子および総得点において、親役割低受容群よりも高受容群の方が、有意に高得点を示した。

父親においても、「親となることによる発達感」は、親役割高受容群が低受容群よりも有意に高い得点を示した ($t(181) = 2.24, p < .05$)。

さらに、母親の職業の有無別に分析したところ、表9に示したように、無職の母親、妻有職の父親に、この傾向が強く認められた。つまり、無職の母親、妻有職の父親は、親役割をよく受容できているほど、親としての発達感が高いことが示唆された。無職の母親は、父親や有職の母親よりも、日々、子供に関わる時間が長く、日常生活の中で育児に関する葛藤をより多く体験していると推察されるが、このような状況の中で親役割を受容できたとき、親としての発達感を体験できると考えられる。また、有職の妻をもつ父親は、専業

表3 父親と母親の「親としての発達感」の比較

	父親 (N=90)		母親 (N=90)		t値
	M	SD	M	SD	
I 柔軟さ	3.33	0.65	3.58	0.63	-2.56**
II 自己抑制	3.46	0.74	3.71	0.70	-2.28*
III 視野の広がり	3.57	0.69	3.86	0.57	-3.04**
IV 運命・信仰・伝統の受容	3.11	0.70	3.41	0.60	-3.08**
V 生きがい・存在感	3.59	0.53	3.63	0.63	-0.43
VI 自己の強さ	3.12	0.75	3.13	0.66	-0.19
全体	3.40	0.55	3.59	0.48	-2.44*

* p<.05, ** p<.01 欠損値=2

表4 父親と母親の「親役割の受容意識」の比較

	父親 (N=91)		母親 (N=91)		t値
	M	SD	M	SD	
積極的・肯定的意識	22.95	4.06	21.69	3.54	2.22*
消極的・否定的意識 ¹⁾	22.34	3.99	19.24	4.41	4.97***
全体(親役割の受容意識)	45.29	6.92	40.93	6.67	4.31***

* p<.05, ***p<.001

1) 得点が低いほど、「消極的・否定的意識」が高いことを示す。

表5 父親と母親の「親役割の受容意識」の比較 (母親無職群)

	父親 (N=61)		母親 (N=61)		t値
	M	SD	M	SD	
積極的・肯定的意識	23.05	3.94	21.72	3.87	1.88
消極的・否定的意識 ¹⁾	22.70	3.62	18.85	4.69	5.08***
全体(親役割の受容意識)	45.75	4.02	40.57	4.39	4.20***

*** p<.001

1) 得点が低いほど、「消極的・否定的意識」が高いことを示す。

表6 父親と母親の「親役割の受容意識」の比較 (母親有職群)

	父親 (N=30)		母親 (N=30)		t値
	M	SD	M	SD	
積極的・肯定的意識	22.73	4.35	21.63	2.80	1.17
消極的・否定的意識 ¹⁾	21.60	4.64	20.03	3.70	1.45
全体(親役割の受容意識)	44.33	7.74	41.66	5.66	1.52

1) 得点が低いほど、「消極的・否定的意識」が高いことを示す。

表7 父親と母親の「夫婦の調和性」の比較

	父親 (N=90)		母親 (N=90)		t値
	M	SD	M	SD	
日常生活・夫婦生活における夫婦の一致性	45.62	13.51	47.67	12.64	-1.05
夫婦関係の満足感	68.73	17.59	61.83	19.58	2.49*
全体(夫婦の調和性)	114.35	27.60	109.50	28.45	1.16

* p<.05, 欠損値=2

育児による親の発達とそれを支える家族要因に関する研究

表8 親役割受容の高低別に見た「親としての発達感」得点(母親)

	親役割高受容群(N=45)		親役割低受容群(N=45)		t値
	M	SD	M	SD	
I 柔軟さ	3.64	0.69	3.52	0.58	0.86
II 自己抑制	3.89	0.65	3.56	0.72	2.30*
III 視野の広がり	3.96	0.49	3.77	0.62	1.59
IV 運命・伝統・信仰の受容	3.54	0.49	3.28	0.66	2.07*
V 生きがい・存在感	3.91	0.52	3.40	0.62	4.27***
VI 自己の強さ	3.23	0.54	3.05	0.73	1.39
全体(親としての発達感)	3.75	0.42	3.46	0.50	3.04**

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001, 欠損値=1

表9 母親の職業の有無別に見た「親としての発達感」得点

	無職母親	有職母親	母親全体	妻無職父親	妻有職父親	父親全体
I 柔軟さ					H>L**	H>L**
II 自己抑制	H>L†		H>L*		H>L†	
III 視野の広がり					H>L*	H>L†
IV 運命・伝統・信仰の受容	H>L*		H>L*			
V 生きがい・存在感	H>L***		H>L***		H>L***	H>L**
VI 自己の強さ	H>L*				H>L*	H>L†
全体(親としての発達感)	H>L**		H>L**		H>L**	H>L*

† p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

H: 親役割高受容群, L: 親役割低受容群

表10 母親の職業観別に見た「親としての発達感」得点

タイプ		無職群			有職群			F値	多重比較
		A積極群	B母親の責任群	C消極・不満群	D自己実現重視群	E経済重視群	F消極・不満群		
N		24	22	15	12	6	12		
柔軟さ	M	3.77	3.49	3.47	3.86	3.62	3.14	2.41*	D>F
	SD	0.52	0.52	0.65	0.76	0.60	0.72		
自己抑制	M	3.83	3.77	3.56	4.04	4.14	3.03	4.32**	A>F, B>F, D>F, E>F
	SD	0.68	0.69	0.80	0.49	0.51	0.38		
視野広がり	M	3.97	3.84	3.70	4.02	4.12	3.58	1.51	
	SD	0.61	0.61	0.63	0.45	0.31	0.43		
運命・伝統	M	3.50	3.45	3.39	3.51	3.67	2.91	2.28	
	SD	0.64	0.46	0.77	0.41	0.31	0.42		
生きがい	M	3.86	3.70	3.18	3.94	3.88	3.24	4.93***	A>C, A>F, D>C, D>F
	SD	0.59	0.58	0.75	0.50	0.46	0.32		
自己強さ	M	3.12	3.31	2.97	3.34	3.20	2.80	1.44	
	SD	0.66	0.61	0.86	0.61	0.25	0.50		
全体	M	3.73	3.63	3.39	3.83	3.83	3.16	4.68***	A>F, B>F, D>F, E>F
	SD	0.46	0.46	0.57	0.36	0.22	0.23		

主婦の妻をもつ父親よりも、育児に関わることが多いと推察されるが、育児に参与することによって、育児の負担感・制約感などの否定的な意識も体験される。有職の妻をもつ父親の親役割の受容は、このような否定的意識を克服した結果であり、そのことが親としての発達感を高めることは、非常に妥当なことであると考えられる。

(2) 夫婦の調和性との関連性

母親が認知した夫婦の調和性得点およびサブカテゴリーである夫婦の一致性得点、夫婦関係の満足感得点を、それぞれ平均点以上を「調和性高群」、平均点以下を「調和性低群」として、親となることによる発達感との関連性を検討した。1 要因分散分析および t 検定の結果、全体としてみた夫婦の調和性高群と低群の間には、I 柔軟性、III 視野の広がり、V 生きがい・存在感の各因子について、高群が低群よりも高い傾向がみられた。夫婦の一致性については、高群が低群よりも有意に高い得点を示した ($t(182) = 2.90, P < .01$)。夫婦関係の満足感については、両群間には有意差は認められなかった。

さらに、母親の職業の有無別に分析したところ、有職群の母親のみ、正の相関が見られた。つまり有職の母親は、夫婦の調和性が高いほど、親としての発達感を高く体験していることが示された ($t(182) = 2.07, p < .05$)。

(3) 夫の家事・育児への参加度との関連性

夫の家事・育児への参加の程度と、親の発達感については、有意な関連性は見られなかった。

(4) 母親の職業観との関連性

母親の職業の有無と親の発達感の間には有意な関連性は見られなかった。しかしながら、母親が職業に就いている/または就いていない理由別に分析すると、両者の間には著しい関連性が認められた。

表2の基準にしたがって分類した母親の職業観のタイプと親の発達感得点の関連性を検討したところ、表10に示した各因子において、有意差が認められた。特に、II 自己抑制、V 生きがい・存在感の各因子、および全体の得点においては、A 積極群(無職)、D 自己実現重視群(有職)が、C・F 消極・不満群よりも有意に高得点を示していた。この結果は、職業の有無にかかわらず、積極的・主体的に職業に就くこと、または就かないことを選択し、そのことの意義を認めている母親は、親としての発達感も高いことを示している。反対に、職業の有無にかかわらず、その様態に不満である母親は、親としての発達感も低い。したがって、この結果より、親としての発達感を支えるものは、職業の有無ではなく、その様態をいかに主体的に選び取り、意味付けるかが重要であると考えられる。

また父親の場合も、妻の職業観によって、親の発達感に大きな相違が見られた。特に、有職の妻をもつ父

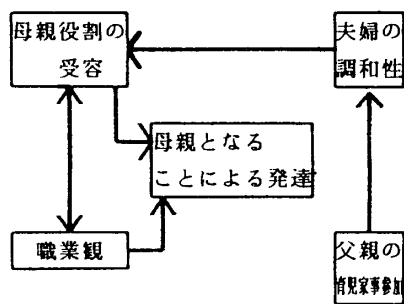


図1 各要因と「母親となることによる発達」との関連性 (無職群)

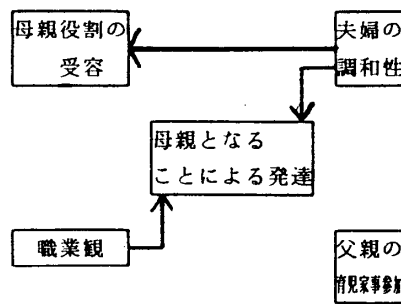


図2 各要因と「母親となることによる発達」との関連性 (有職群)

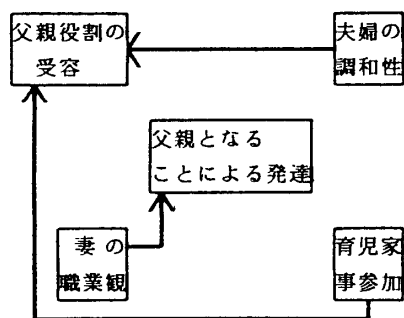


図3 各要因と「父親となることによる発達」との関連性 (妻無職群)

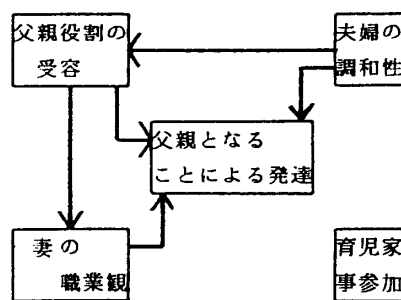


図4 各要因と「父親となることによる発達」との関連性 (妻有職群)

親は、D 自己実現重視群が F 消極・不満群よりも、すべての因子において有意に高い発達感を示していた。これは、母親本人と同様の傾向を示す結果であった。

3. 各要因間の関連性の分析

最後に、親の発達感を促進する要因と仮定して、本研究で検討した各要因、つまり①親役割の受容、②夫婦の調和性、③父親の育児・家事参加、④母親の職業観の相互の関連性を検討した。母親（妻）の職業の有無にかかわらず、職業観（職業をもつ理由・もたない理由）は親としての成長・発達に大きな影響を及ぼしていることが示唆された。また、母親（妻）の職業の有無別に分析すると、上記の4要因の影響のし方には大きな相違が見られた（図1～4）。

無職群の母親は、①親役割の受容、②職業観（就労しない理由）と、親としての成長・発達感の間に（図1）、また有職群の母親は、①夫婦の調和性、②職業観と、親としての成長・発達感の間に、正の相関が見られた（図2）。

妻無職群の父親は、①妻の職業観（就労しない理由）と親としての成長・発達感の間に（図3）、妻有職群の父親では、①親役割の受容、②夫婦の調和性、③妻の職業観と、親としての成長・発達感の間に正の相関が見られた（図4）。

つまり、妻が有職の家庭と専業主婦の家庭とでは、親の側の成長・発達感や育児への積極的関与を促進する要因には、異なる特徴が見出された。特に母親が有職の家庭では、夫婦関係のあり方が重要な要因であることが示唆された。

4. 全体のまとめと考察

本研究は、育児による親の発達を支える家族要因について、心理学的な視点から分析したものである。本研究の結果をまとめると、次のような点が示唆された。

1. 全体的にみると、父親よりも、日々、直接、育児に関わることの多い母親の方が、親の発達感には有意に高かった。これは、先行研究を支持する結果であった。

2. しかしながら、母親の職業の有無によって、親

の発達感に影響を与える要因には、相違が認められた。また、母親の職業観は、母親本人のみならず父親の育児による発達感にも影響を及ぼすことが示された。

少子高齢社会を迎えた我が国では、結婚・出産後も子育てと職業を両立しようとする傾向は、今後、ますます増大していくことであろう。しかしながら、よりよい子育てを実現していくためには、親の側も育児に積極的に関与し、自らにとっても育児の意義を実感できる体験が不可欠である。

また、母親の職業観、つまり職業に就く理由、就かない理由は、職業の有無以上に、親としての発達にとって重要な要因である。職業に就くこと、就かないことをいかに主体的に選び取り、その意義を積極的に認められるかが、母親本人のみならず、夫の父親としての発達感にも影響を及ぼすのである。ライフサイクルの中に占める育児期の比率が相対的に減少した今日、夫も妻も子育てと職業を自らの人生の中にどのように組み込み、両立させていくかが、重要な課題であると考えられる。

〈付記〉

本研究は、平成10・11年度厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）分担研究「幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究」の一部として行われた。

引用文献

- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み。発達心理学研究, 5, 72-83.
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 1996 子供の発達と母子関係・夫婦関係：幼児をもつ家族について。発達心理学研究, 7, 31-40.
- 牧野暢男 1996 父親にとっての子育て体験の意味。牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子（編）子供の発達と父親の役割。ミネルヴァ書房, Pp. 50-72.
- 大日向雅美 1988 母性の研究。川島書店。